

序 章

Knowlton は自然の学説 (A Doctrine of Nature) が Shakespeare の人生観の核をなすものであり、Shakespeare の自然観は自然観の歴史に密接な関係を有する、そしてその自然観はギリシャ哲学、ローマ法、中世哲学、およびルネッサンスの中心思想であると述べている¹⁾。

Shakespeare は実際に、nature という語を多用している。実に37の作品と2編の長詩とソネット集において、派生語も含めた nature の使用頻度は520有余に及ぶ。勿論用いられているすべての nature が重要な意味を帯びているわけではないが、nature の語がテーマと密接に結びついている作品が多い。ところで nature について、John Donne は This terme the law of Nature, is so variously and unconstantly deliver'd, as I confesse I read it a hundred times before I understand it once. と言っている²⁾。d'Entrèves は自然法という言葉の意味が多様なのは nature の意味が多様であるからだと述べ、nature という語は諸刃の剣ではあるが、柔軟な用い方のできる語であると述べている³⁾。nature という語はラテン語の natura に由来する。そして natura はギリシャ語 physis の訳語であり、その physis の意味が多様なのである。

野町氏は「プロティノスの自然観」において、ギリシャ思想における「自然」の問題は複雑で、体系化が困難である理由を次のように述べている。日本語の「自然」と同様に、ギリシャ語 physis が有する多義性とその多義性に即応してそれぞれの哲学者は、その思想の展開においてピュシスにさまざまな意味合いを帯びさせて用い、コンテキストによっては、同一の思想家においても、ピュシスの意味がまったく異なっていることがしばしば見受けられる。むしろピュシスの多義性は、哲学者によってピュシスの理解が異なり、また問題ごとに独自の意味がそこに付せられてくることに起因する。しかし重要なことは、ある思想家について、そのピュシス観のみを取り出し問題にすることが不可能かつ不当であり、ピュシスの問題が思想家により異なり、またそのコンテキストにおいて多義にわたることは、ピュシス観がその思想家の本質なり独自性と深く関わっていることを示唆していると述べている⁴⁾。

そのように *physis*、*natura*、*nature* の意味は多様であり、一見分かった気になっても、厳密に意味を理解しようとするときと当惑することが多い。したがって Shakespeare の全作品の *nature* に当たり、その基本的な意味の検討を行った。*nature* に相当する英語固有の語は、*OED* にあるように、*kind* であり、Shakespeare 以前の作家では、*nature* の意味で、*kind* 及びその派生語が多用されている。Shakespeare にもいくつかの例が見られる。まず *physis* を、次に *natura* の意味を検討する。

I

physis の意味

廣川洋一氏によると自然万有を意味する語はピュシス (*physis*) とコスモス (*cosmos*) およびパンタ (*panta*) の 3 語があり、*physis* はホメロスが靈的な薬草モーリュの *physis* として用い、薬草の生長による形姿 (*eidōs*) を意味し、またものの誕生・起源をも意味し、他方ものの性格・本性を意味するようになったと述べている。更に「不老なる *physis* (自然万有) の/不老のコスモス (秩序世界) を眺め」という悲劇詩人エウリピデスのある断片について、*physis* とコスモスの関連で用いられていることは、アナクシメネスの断片「空気である私たちの魂が私たちをしっかりと掌握しているのと同じように、氣息と空気がコスモス全体を包み囲んでいる」という言葉とを考え合わせると、自然万有を構成する自然世界と人間、マクロコスモスとミクロコスモスの濃密な対応関係を語るものとして注目すべきと述べている。

そして廣川洋一氏は自然万有を意味する *physis* と *panta* と *cosmos* の意味の類似と相違を比較検討した後、ソクラテス以前の自然観を、(一) 自然万有は「生み出されたもの」、したがってそれは「生命あるいは生命原理としての魂 (プシューケー) をもつもの、生けるもの」(二) 自然万有は、生命ある元のものから、同一のプロセスのもとに生み出されたいっさいのものを含む総体 (パンタ)、全体的包括者である。したがって、この中に含まれる自然世界も人間もともに連続的で類縁の関係にあることが了解されている。(三) 自然万有は、一定の秩序ある構造をなす、あるいは端的に数学的構造をなす秩序

世界（コスモス）である。自然万有はその構造を合理的に理解することができるような秩序ある世界であると要約している⁵⁾。

Collingwood もまたギリシャの自然科学は、自然の世界には精神が充満し、浸透しているという原理に基づいていると言い、そして精神はその支配者として現れ、第一に、自身の物体に、第二に、物体の環境に秩序を強制する、したがって自然の世界は生きた世界であり、秩序があり規則的な運動の世界であると述べている⁶⁾。

更に Collingwood は叡知的有機体としての自然というギリシャ的な見方は自然の世界と個々の人間存在との類比に基づいていて、人間の中の幾つかの特徴を見つけ、自然にも同じ特徴を持つという考えにいたると述べている⁷⁾。このマクロコスモスとミクロコスモスとの対比の思想は、伝統となり、ルネッサンスにおいては、フィッチーノやレオナルド・ダ・ビンチにおいて顕著に見られるのである。Shakespeare もこの思想を劇に取り入れている。

Macbeth は、Duncan 王弑逆を想像するだけで、「殺しは想像にすぎないのに、その想いがわしの人間という国家を揺るがすのだ」“My thought, whose murder yet is but fantastical, / Shakes so my single state of man,…” (I.iii.139-140) と言う。

Brutus も Caesar 暗殺の一味に加わり、煩悶し、次のように言っている。

...the state of man,

Like to a little kingdom, suffers then

The nature of an insurrection.

(II.i.67-9)

人間という国家は小王国のように、

内乱に苦しむのだ。

この台詞について、the state of man は個人と国家の双方を意味し、Brutus は後の tragic heroes と同様に、*nature* に含意されているが、己の苦悩、心の混乱を宇宙の混乱と重ね合わせていると Daniell は注を付している⁸⁾。更に *King Lear* における嵐の場は、大自然の激しい嵐と娘たちの忘恩に怒る Lear の心の嵐が呼応して観客を圧倒するが、Lear が嵐の中で怒号し、奮闘する様を紳

士は Lear は「人間という小世界の心の嵐にあつて吹き荒れる風雨を出し抜こうとしておられる」 Strives in his little world of man to out-storm / The to-and-fro- conflicting wind and rain. (III.i.10-11) と言う。

Collingwood は、アリストテレスはソクラテス以前の哲学者をフュシオロゴイ (physiologi) つまり自然論者と呼んでいるが、その思想の特徴は、「自然とは何か」という問いをたてるときただちに「事物はなにからできているか」あるいは「われわれが知覚しうる自然の世界のあらゆる変化の根底にある根源的かつ不変なる実体は何か」という問いに変わるということを述べている。

そして Collingwood は、このような問いをたてる民族には、強固な予備的な論点が定着しているとして、次の3点を挙げている。

1 'natural' things が存在すること、すなわち人間や他の動物の技術による artificial な産物とその反対物である 'natural' な事物が存在すること。

2 'natural' things が a single 'world of nature' を構成する。自ら生じたり存在する事物は共通の特徴だけでなく、全てに適用できる命題を作ることが可能ということである。

3 'what is common to all 'natural' things は 'their being made of a single 'substance' or material' である。

そういった信念のもとに、'what can we say about this single substance?' という問いをたて、そして彼らはその実体を、全てを律する絶対的で確実な前提と考える。

タレスはその実体を水であると考えたのである。何故タレスが水と考えたかについてはアリストテレスが第一に、全ての有機体を養うものとして湿気が必要であること。第二として全ての動物の生命は精液から始まるからと推測しているのであると Collingwood は言う。

タレスは自然の世界を1つの有機体、動物と考えていたと言う。また世界は神によって造られたとも考えている。ルネッサンスの自然観とは全く相違する見方である。ルネッサンスでは、自然界は神という技師がその目的にそうように作った宇宙大の機械であるのに対して、タレスは自然界をそれ自身にそうように動いている宇宙大の動物と考えている。そしてタレスの神とル

ネッサンスの神の違いは、ルネッサンスの神が無から自然世界を製作したが、タレスの神はいわば、魔法使いの神である。

アナクシマンドロスはト・アペイロン(to apeiron)無限者であるとした。第一に空間的にも、時間的にも、量的にも無限であること、第二に質的にも無規定であること、つまり固体とか気体とか液体とかの特徴を欠いているからである。この無限者を神と同一視した。

アナクシメネスは始原的実体を大気あるいは霞、アエール(aer)とする。自然物の相違はこの霞が希薄化して火となり、また濃縮化して風、雲、水、地、石になったりするといっているのである⁹⁾。

ヘラクレイトスは万物の変化が自然の真の姿であり、万物流転を示す火が始原的実体とする。

そしてエンペドクレスが土、水、空気、火の四元素を万物の作り出す元であるとする四元素説を唱えた。この四元素説は伝統的なものとなる。Shakespeareはその四元素説の思想を取り入れている。*Julius Caesar*においてAntonyは告別の辞でBrutusについて述べている。

His life was gentle, and the elements
So mixed in him that nature might stand up
And say to all the world, 'This was a man!'

(V.v.73-5)

彼の生涯は高潔で、各要素が見事に調和しているので、
大自然が立ち上がって、全世界に向かって

「この人こそ立派な人間であった」と言うほどであった。

Daniellはelements / So mixedについて、air, earth, fire and water so tempered together in the 'humours' that they made someone of outstanding 'temperament'. と注釈を施している¹⁰⁾。

牛田氏は、アリストテレスは「自然」に定義を与える必要を考えた最初の人であると述べているように、physisを考察する場合、アリストテレスの自然観を一瞥することが重要である。牛田氏は、アリストテレスは『自然学』ベータ巻一章において「自然」を「技術」との対比から始めているが、もし

家が自然によって生成するなら、それは技術によって生成する通りに生成するだろうと述べている点を挙げ、自然と技術の営みの間に何の乖離も感じられず、むしろ技術は自然を理解するための1つの鍵ではなかろうかと述べている。そして氏は「自然」と「技術」の関連と区別を明確にし、自然の定義と、自然と呼ばれるものは何であるかという自然構成の問題を考察する。

プラトンの『法律』第十卷の「自然による生成、技術による生成、偶然による生成」がアリストテレスの著書に繰り返し現れる事実を指摘する。そこではプラトンは自然を無目的で無秩序な作用力を持つ原初的な存在とする無神論的自然思想に対して、自然は魂を有すると考え、「自然」の名のもとに魂と技術が結束して挑戦していると言う。

ではアリストテレスにとって、それは何を意味するのか。第一に、自然と技術は、事物が目的的に生成するという点で、偶然と区別されるという。偶然は自然と技術の欠如である。自然と技術を偶然との対立において捉える見方はプラトンから継承している。それはまた偶然を自然とみなす機械論的自然観に反対する立場を示している。

次に自然と技術の類似性について考察する。自然的生成と技術的生成を区別していない。生成するものは質料と形相の合成体である。したがって何かが生じるためには、そのものの形相と質料、そして形相が質料のうちに生じる過程を惹き起こす作用者という3つの原因が必要である。この点も自然的な生成も技術的な生成も異なるところがない。そして自然的な生成であれ、技術的な生成であれ、その過程を一貫して管轄するのは形相である。アリストテレスにおいて、自然物を造るのは「造物主」でなくて、自然それ自体である。自然と技術とがこのように類似化されることの疑問を解くことに向かう。

その疑問は「技術は自然を模倣する」という主張によって解かれると言う。最も技術は自然に盲従するわけではない。「技術は自然が仕上げるのでできないことを完成させる」「どんな技術も教育も自然の遣り残したところを補充することを意図する」を引用して、自然は技術にモデルを示すが、そのモデルには粗雑なところがあるのだろう、この意味で互いに補完し合うのだ

と言う。このアリストテレスの自然と技術についての考えは、*The Winter's Tale*における Polixenes と Perdita との nature vs. art (IV.iv.89-97) 問答を思い起こさせる。

牛田氏は、アリストテレスは自然によってあるもの、自然によって構成されているものの総体をしばしば自然とか全自然と呼んでいるが、この意味の自然は宇宙ウラノス、世界コスモスと同義であると述べている。世界が自然物体の総体であるなら、アリストテレスがそれを自然と呼ぶのは、それぞれの物体の自然の総体という意味においてである。

また『自然学』で、「自然によってあるものは、…運動するものであるとわれわれは前提しなければならない」という言葉を引き合いに出して、全自然もまたつねに運動の観点から捉えられるのがアリストテレスの自然観の特徴であると牛田氏は述べている¹¹⁾。更にアリストテレスに関する自然について、Collingwood の見解を見ていこう。

Collingwood は、現代のヨーロッパ人は、nature とは何かという問いを受けると、「What kinds of things exist in the natural world?」という問いをたて、自然界とか自然史を記述して答えるに違いないと言う。

それは現代ヨーロッパの言語で nature という言葉は、集合名詞として自然的事物の総体ないし総計的全体を意味するからである。同時にこの意味だけでなく、別の意味もあり、その方を厳密に言って本来の意味、つまり根源的原因という意味での「原理」を指すと言う。更に具体的に次のように述べている。とねりこの自然つまり本性はしなやかであり、樗の自然つまり本性は堅い。ここでいう「自然」つまり「本性」という言葉は、その所有者としてその有るがままの行動様式をとらせる何らかの力を意味すると言い、しかもその行動様式の根源的原因はその中に内在する何かと言う。そして根源的原因が外にあるとすれば、その行動様式は「自然的」とはいえず「強制」によるということになる。

フュシス (physis) という言葉はこの2通りの意味で使われていると言う。ギリシャ文学の初期の文献では、自然・本性が初期のギリシャの作家の中で使われる唯一の意味であり、ギリシャ文学史全体を通じて、その規範的な

意味をとどめていると言う。しかしごく稀に、比較的遅くなってこの言葉が自然的事物の全体または総体という意味を持つようになり、「世界」を意味する *kosmos* と同義語になる。そしてゴルギアスの「非存在について、あるいは自然について」という表題に用いられている *physis* は古代著作家の訳書によると、総体、自然の世界を意味すると言う。

そしてイオニアの哲学者は *nature* をこの意味で用いることはなく、自然・本性の意味で用いているのである¹²⁾。

Collingwood によれば、アリストテレスは哲学辞典編纂法にかれ特有の方法を持っている。1つの言葉がいくつかの異なった意味をもつことに注目し、これら様々な意味が相互につながりをもち、そのために必ずしも曖昧ではないということを認めている。そして様々な意味のうち1つだけが最も深く真なる意味である。その他の意味は近似した意味である。

アリストテレスは *physis* (φύσις) の意味を7項に分けている。

(1) *Origin or birth*: 起源、または生まれである。Collingwood は、ギリシャの文献にこの意味をもつことはない、前4世紀の誤った語源解釈によるものという David Ross 卿の意見に賛同している。

(2) *That out of which things grow, their seed*. 事物がそこから成長する基盤、その種子。これもギリシャの文献には見出せない。第一の意味と第三の意味とをつなぐ環として挿入されたものと推測する。

(3) *The source of movement or change in natural objects*. 自然的物体の運動ないし変化の根拠。Collingwood によれば、これは石が自然に落ちるとか火が自然に発火するという時の意味である。普通のギリシャ語の用法に照応すると言う。自然の理法・条理であろう。

(4) *The primitive matter out of which things are made*. 事物がそこから構成される始原的物質。これはイオニア学派によって強調された意味であると Collingwood は言う。Burnet は、この意味が初期ギリシャ哲学での唯一の意味であったと考えた。Collingwood は前6世紀の哲学においてこの語は事物の本質ないし自然つまり本性を意味したが、事物の本性を構成要素に関連付けて説明しようとしたというのがより真実に近いと言っている。

(5) *The essence or form of natural things.* 自然的物の本質ないし形相。前5世紀の哲学においても、普通のギリシャ語においても、実際にこの意味で使用されたと言う。しかし「自然的物」を定義していないから、この定義は不完全と言う。

(6) *Essence or form in general.* 一般的に本質ないし形相。プラトンは「善の自然」という言い方をするがその善とは自然的物ではない。

(7) *The essence of things which have a source of movement in themselves.* 「自然的物」を「みずからの内に運動の根拠をもつ物」と定義して、みずからの内に運動の根拠をもつ物の本質。アリストテレスがこれを根源的意味とみなしたと言う。彼自身このように用いている。自然を技巧と対照させ、また自然を強制力と対照させる時、物がそれ自体の権限で成長したり、組織をもったり運動したりする原理をもっていること、これが物の自然という言葉の意味である。いろいろな物を自然的と呼ぶとき、そのような原理をもっているということを意味する¹³⁾。

physis をまとめておこう。基本的には、*physis* は自然万有・被造物、自然を造る自然、ものの本性・性格、自然の理法・条理を意味すると考えてよいだろう。

II

natura の意味

佐藤氏は『アレクサンドリアのクレメンスにおける古代キリスト教自然観』のなかで、日本語本来の「自然」（他者の力を借りないで、それ自体に内在する働きによってそうなり、そうあること）も、対応欧米語の語源 *physis, natura*（本質、本性、宇宙秩序、生命原理）も本来状況語であって、「もの」をさす対象概念ではなかった。したがって *natura* の用語研究は目的に利することが少ないと言う。更に古代キリスト教自然観探求の手段としては、中世以来の用語として「所産的自然」（*natura naturata*）と「能産的自然」（*natura naturans*）の2区分が適切である。そして前者は「顕在化した自然観」の領域にあたり、「自然化されたもの」「生み出されたもの」であり、今日の意味での自然、自

然世界、自然現象をさす。この概念はキリスト教自然観にとって実り少ないと言う。後者は「自然化するもの」「生み出すもの」、何らかの生産活動としての自然であり、「潜在化した自然観」の領域にあたる。そして古代教父の自然観解明には潜在化した自然観を探ることが重要と述べている¹⁴⁾。

そして「神の公正秩序としての法則性を内包する自然は、人間の法に無限にまさる」とする彼らの自然法的理論は、自然にかなうことがまさに神の意志と一致することになるのであるから、「自然にかなった生」を営むことをわれわれに要求すると述べている¹⁵⁾。次に原罪説で大きな役割を果たしたアウグスティヌスについて言及することが必要であろう。

アウグスティヌスがすべての物的被造物は、土、水、空気、火という四つの元素から組み立てられているという記述をリーゼンフーバーは引用している。リーゼンフーバーは、アウグスティヌスは *natura* を自然・本性の意味で用いるのが普通であると言う。そしてアウグスティヌスにとって、「自然・本性とは、あるものがその類においてそれであると知解されるところのもの以外の何ものでもない」という *natura* の概念は本質的な点において、「本質」(*essentia*)や「実体」(*substantia*)の概念と一致する。「それゆえ、われわれはいまや存在(*esse*)というものに基づき、新しい名称によって‘本質’(*essentia*)と呼ぶが、これをわれわれは大概実体と名付ける。そういうわけで、これらの名称を持っていなかった古人は、本質、実体という代わりに、自然・本性と呼んだのである」というアウグスティヌスの言葉をリーゼンフーバーは指摘している¹⁶⁾。

しかし「自然の通常の進行」(*usitatum naturae cursum*)や「全自然」(*universa natura*)という例をリーゼンフーバーは挙げているように、アウグスティヌスが被造的存者の全体の意味でも用いているのである。また「自然がわれわれには極めて隠されたものである内的運動によってこのことをなす。しかし、神がこの運動をそれによって保ち、創造するところの内奥のはたらきをひかえるならば、いわば消え去るごとくにいかなる自然・本性も引き続いてはのこらないだろう」を引用し、リーゼンフーバーはこのような全自然の概念は大地の概念に近づくとする。リーゼンフーバーは、大地は創造者ではないが、

実り豊かな母なるものであるとアウグスティヌスは言っているのだと述べている¹⁷⁾。アウグスティヌスは原罪説で後代に大きな影響を与えている。それは *natura* にも大きく関わっている。

パウロの「一人の人によって罪がこの世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです」(Romans, VII.12) という言葉からアウグスティヌスは原罪説を導き出す。キリスト教的自然史における第一の出来事、すなわち神がすべてを善に創造した。第二の事件が、神の命に対する Adam と Eve の反抗、すなわち原罪である。第三は、われわれが救われるのはキリストを通しての神の恩寵によるのである。アウグスティヌスは「自然と恩寵」の中で次のように述べている。

Man's nature, indeed, was created at first faultless and without any sin; but that nature of man in which every one is born from Adam, now wants the Physician, because it is not sound. All good qualities, no doubt, which it still possesses in its make, life, senses, intellect, it has of the Most High God, its Creator and Maker. But the flaw, which darkens and weakens all those natural goods, so that it has need of illumination and healing, it has not contracted from its blameless Creator—but from that original sin, which is committed by free will. Accordingly, criminal nature has its part in most righteous punishment. For, if we are now newly created in Christ, we were, for all that, children of wrath, even as others, “but God, who is rich in mercy, for His great love wherewith He loved us, even when we were dead in sins, hath quickened us together with Christ, by whose grace we were saved.”¹⁸⁾

また長倉氏は、この世界は全体として全能なる神によって創造されたのであり、本来善き自然である。しかしこの本来善きものとして創造された自然は善さを失っている、それは人間の原罪がもたらした結果であり、自然本来の姿ではないというボナヴェントゥラの言葉を引用している¹⁹⁾。

今義博氏によれば、エリウゲナは『ペリフュセオン』において、*natura* の定義から始め、*physis* ないし *natura* は精神に捉えられるものと捉えられないもののすべてを含めて、「有るものと有らぬもののすべて」と定義されていて、

これは最も広義の全体であり、総体、一切、普遍である。physis ないし natura はまさしく「普遍的名辞」(generale nomen, vocabulum)である。この意味で physis ないし natura は「すべてのもの」、「全体」、「普遍」を意味する omnia, totum, universitas と同義であり、universitas ないし πᾶν (全体、普遍) と言いかえられたり、universalis natura や universa natura (全体的ないし普遍的自然) と呼びかえられたりしていると言う。

更にエリウゲナは physis と ousia とまた natura と essentia とが互換的に用いられていたことを知っていたが、それらの間の相違も意識していたと言う。そして ousia が einai (有) から、essentia が esse (有) から、また physis が phyedai (生まれる、生ずる) から、natura が nasci (生まれる、生ずる) から来ているという語源的由来に基づいて、それらの本来の意味について、ousia と essentia は不変・不滅に存在するものを意味し、physis と natura は、時間・空間における生成によって存在する可変的なものを意味するとしている。

またエリウゲナは人間と世界の神への帰還は、人間の自然本性によって、この現実の世で実現可能と考えている。つまり神への帰還と本来の自己への復帰は2つの方法、聖書の読解と自然界の読解であり、自然界の読解を「自然観想」と言う。自然観想は単なる自然の客観的観察でなく、真の自己への復帰を本質的契機としており、自然を観想する者を神へ、真の自己へ導く教師となる。「自然そのものが教師なのだ。自然はだまっているわけでないのだ。」しかし、自己の外なる自然の観想以上に重要なのは自己の「内なる自然」(natura interior)である。人間は「自然」という natura を観ることによって「本性」としての natura、すなわち「本有」である essentia へ近づくと言うのである²⁰。nature がやはり自然界と本性の2通りの意味に用いられている。

また擬人化された自然について、リーゼンフーバーによれば、ベルナルドゥス・シルヴェストリス(Bernardus Silvestris)は『宇宙論』において、擬人化された自然とヌースあるいは摂理によって天の理性であるウラニアと生命原理であるフュシスの助けを借り、世界と人間をカオスから生み出す様子を叙述しており、またアラヌス・アブ・インスリス(Alanus ab Insulis)の『自然

の嘆きについて』(De planctu Naturae)と『アンティクラウディアヌス』(Anticlaudianus)において、女性として擬人化された自然(心的知恵、ポエティウスの哲学、プラトンの宇宙魂の擬人化)が創造的力、および倫理的・社会的行為についての忠告者として語っているという。そしてリーゼンフーバーはここでの自然は人間に対して規範となっており、物理的自然秩序を通して「自然の正義」が12世紀後半以降、社会的・政治的秩序の基盤、倫理的・法的に規範となる「自然法」(lex naturae)となっていたと述べている²¹⁾。このように基本的には natura は被造物としての自然、創造力を有する自然、自然・本性、ものの性格、倫理的な擬人化された自然、自然の理法・条理を意味する。

III

nature の意味

Bush は nature の理解の仕方に2通りあると言い、次のように述べている。nature は the nature of things と natural things in themselves の両方を意味し、the law of the world と the world itself の双方の名称である。つまりそれは *The French Academy* の“the one spirituell, intelligible and the unchangeable beginning of motion and rest, or rather the vertue, efficient, and preserving cause of all things”と“the other, sensible, mutable, and subject to generation and corruption, respecting all things that have life, and shall have end.”という定義と同じである。すなわち nature は事物の自然・本性と自然物そのもの、また世界の理法と世界そのものの双方を意味する。更に1つは、超自然的、知的、不変の運動と静止の動因、いやむしろすべての事物を生み出す力であり、存続させる原因である。いま1つは、感知され、無常で、産出し、また腐敗するものであり、生命を有し、死を迎える全ての事物に関わるものということである。

更に簡潔に、*The French Academy* は“Nature is the order and continuance of the works of God.”と記述していると言う。しかしそれは2つの面を有する an order and continuance である an idea of natural law と the fact of natural things との2面であり、the unchanging natural principle of the world, the preserving

cause of all things と the changing face of the world, all things that have life and shall have end.との双方を意味し、natural であるあらゆるもの、すなわち natura naturata (所産的自然・造られた本性・自然) と、natural である理由、つまり natura naturans (能産的自然・創造する本性・自然) との双方の名称であると述べている²²⁾。

更に Bush は、nature は変化の事実と変化を超える理念であり、自然のこの2面を通して Shakespeare の人物たちは、最も偉大な瞬間に、事物そのものと、事物の意味との双方に関わる。そして Hamlet が “the readiness is all.” と言うとき、彼の世界を受け入れたようだといい、また Lear が Cordelia の腕の中で目を覚まし、Cordelia に向かって、“You are a spirit, I know.” と言うとき、natural life が time と time を超えたもの双方に属するよう見えると述べている²³⁾。

ギリシャ語の physis、ラテン語の natura 及び nature の概観を通じて、physis と natura と nature とが主として自然・本性、被造物・自然界、創造力を有する自然、自然の理法・条理、倫理的な擬人化された自然及びものの性格等を意味するということが理解できたと思う。ものの性格を除いて、これらの意味は大体 Schmidt の定義①に該当するだろう。それでは Shakespeare の nature を見ることにする。まず Schmidt²⁴⁾ の定義から検討する。

IV

Schmidt の *Shakespeare-Lexicon* の定義

Shakespeare の全作品に用いられている Nature (usually fem., sometimes neuter, as in Wint. I.ii.151 and Oth. III.iii.227.) の意味として6項目に分類している。

① the world around us as created and creating by fixed and eternal laws:被造物界と造化の自然、natura naturata (所産的自然・造られた本性) と natura naturans (能産的自然・創造する本性) を意味する。更に区分している。

Denoting spontaneous growth and formation: (自然的な発生・成長を示すものとして)

Opposed to art: (人工・技術の対置概念として)

Opposed to fortune: (運命の対置概念として)

Opposed to the agency of supernatural powers: (超自然の対置概念として)

Opposed to human institutions or tendencies: (人間の制度や傾向の対置概念として)

①は造化の自然・自然の女神、大自然、被造物・被造物界、自然の理法・摂理等を意味する。

② the native sensation, innate and involuntary affection of the heart and mind: 人間としてひとりで湧いてくる感情、つまり natural feeling の意味である。

③ the physical and moral constitution of man: 肉体と精神を有する人体、そのような体質をもつ人間。

④ individual constitution, personal character: 個人の体質、個人の性格。

⑤ quality, sort, kind: 本質、性質、種類。

⑥ human life, vitality: 人の生命、生命力、活力。

V

Edgar C. Knowlton の定義・説明

Knowlton は nature を 8 項目に分類している。そして各項目の定義に歴史的、哲学的視点から評釈を行っている。ここでは定義だけを挙げておく。

1 the creator つまり Dame Nature of tradition, the vicar of God の意味に用いられている。造化の自然、神の代理としての、伝統的な自然の女神である。創造という機能に関して Nature は Art と対立する。

2 nature はすべての生き物が創造に与るように方向づける。death と張り合うために不滅を計る。ここでは nature は life を意味する。

3 nature は death の変化と対立するが、それに従わねばならない。change と fixity についてはヘラクレイトスやプラトンからの伝統に見られる nature の面である。成長を意味する。

4 nature は、ある程度の fixity すなわち性格を与えている。個人ではどうにもならない面である。

5 nature は人間が肉体と精神を持っていることを意味する。そのために眠りや他の機能をはたさねばならない。

6 nature は個人が feelings (instincts and emotions) を持っていることを意味する。この感情は度を越すと均衡を失うが、普段は正常に方向づけられる。個人と社会との関わり、親子関係に関わる。natural feelings は子の義務を認識し、忘恩と対立する。Shakespeare の時代には kind-ness と natural feelings が同じ意味を有していた。こうして nature は loyalty and true love と調和するのである。

7 理性が認める nature as feeling は、nature が a broad moral law を意味することを示す。人は nature にしたがって行動しなければならない。中庸を尊ぶことが必要である。nature の倫理的な分野は個人と社会の関係に及ぶ。

8 nature は、公私の行動の規範である。nature は art が従い、art を評価する規範であり、理念である。

以下詩および全劇作品の派生語を含めたすべての nature を吟味検討する。なおテキストは「シェイクスピア大全」《The Arden Shakespeare Second Series Play Texts (and Arden Shakespeare First Series Sonnets)》CD-ROM 版（新潮社、2003）を使用した。また注の関連で、他の版を用いたところもある。

¹⁾ Edgar C. Knowlton, "Nature and Shakespeare", PMLA, LI, 1936, p.719.

²⁾ John Donne, *Selected Prose*, Penguin Books Ltd., Harmondsworth, England, 1987, p.64.

³⁾ S. P. d'Entrèves, *Natural Law*, Hutchinson & Co. Ltd., 1955, p.11.

⁴⁾ 野町 啓、「プロティノスの自然観」、上智大学中世思想研究所編、『古代の自然観』、創文社、1989、pp.109-110.

⁵⁾ 廣川洋一、「ソクラテス以前における自然概念」、上智大学中世思想研究所編、『古代の自然観』、創文社、1989、pp.1-10, p.21.

⁶⁾ R. G. Collingwood, *The Idea of Nature*, Oxford University Press, Paperbacks, 1965, p.3.

R. G. コリングウッド、(平林康之、大沼忠弘共訳)、『自然の観念』、みすず書房、1985、を参考にした。

⁷⁾ Collingwood, *ibid.*, p.8.

⁸⁾ David Daniell, ed., *Julius Caesar*, The Arden Shakespeare (third series), Thomas Nelson and Sons Ltd., 1998, note.

⁹⁾ R. G. Collingwood, *op. cit.*, pp.29-36.

¹⁰⁾ David Daniell, *op. cit.*, note.

- 11) 牛田徳子、「アリストテレスの自然観」、上智大学中世思想研究所編、『古代の自然観』、創文社、1989、pp.47-72.
- 12) P. G. Collingwood, *op. cit.*, pp.43-44.
- 13) P. G. Collingwood, *ibid.*, pp.80-82.
- 14) 佐藤吉昭、「アレキサンドリアのクレメンスにおける古代キリスト教自然観」、上智大学中世思想研究所編、『古代の自然観』、創文社、1989、pp.230-231.
- 15) 佐藤吉昭、同書、p.241.
- 16) K. リーゼンフーバー、(村井則夫・矢玉俊彦他訳)『中世哲学の源流』、創文社、1995、pp.438-439.
- 17) K. リーゼンフーバー、*ibid.*, p.312.
- 18) On Nature and Grace by St. Augustine of Hippo, www.newadvent.org/fathers/1593.html. 3. 3. Natura quippe hominis primitus inculpata et sine ullo vitio creata est; natura vero ista hominis, qua unusquisque ex Adam nascitur, iam medico indiget, quia sana non est. Omnia quidem bona, quae habet in formazione, vita, sensibus, mente, a summo Deo habet creatore et artifice suo. Vitium vero, quod ista naturale bona contenebrat et infirmat, ut illuminatione et curatione opus habeat, non ab inculpabili artifice contractum est, sed ex originali peccato, quod commissum est libero arbitrio. Ac per hoc natura poenalis ad vindictam iustissimam pertinet. Si enim iam sumus in Christo nova creatura, tamen eramus natura filii irae sicut et ceteri; Deus autem, qui dives est in misericordia, propter multam dilectionem, qua dilexit nos, et cum essemus mortui delictis, convivicavit nos Christo cuius gratia sumus salvi facti.
www.augustinus.it/latino/natura_grazia/index.htm
- 19) 長倉久子、「ボナヴェントゥラの自然観」、上智大学中世思想研究所編、『中世の自然観』、創文社、1991、pp.5-6、pp.23-25.
- 20) 今義博、「エリウゲナにおける自然の形而上学」、上智大学中世思想研究所編、『中世の自然観』、創文社、1991、pp.5-6、pp.23-25.
- 21) K. リーゼンフーバー、*op. cit.*, p.401.
- 22) Geoffrey Bush, *Shakespeare and The Natural Condition*, Harvard U. P. 1956, p.4.
- 23) Geoffrey Bush, *ibid.*, pp.4-5.
- 24) Alexander Schmidt, *Shakespeare-Lexicon*, 2 vols, Walter De Gruyter & Co. Berlin, 1962.